令和７（2025）年度　芸術工学部編入学試験問題

小論文

解　答　紙

受　験　番　号

（3 枚中 1 枚目）

問１

【段落】たとえばマンションのリノベーションを考えてみる。ごたごたとした装飾や不必要な機能にあふれた部屋は、ある特定の住人の生活用途やそのときの流行などを反映しており、そうした状況が変わってしまえばその役割を失ってしまう。これに対して、機能や装飾を省き、建築物として最低限必要なスケルトンにまで形を単純化してしまえば、その部屋は一見すると退行化や劣化したように感じられる。

【段落】だがそのとき、ひとはそのスケルトンをどのように活かせるかを考えるようになり、建築物はあらたな生成の可能性という意味での生命力をふたたび獲得することになる。そのときには、余分なものをすべて省くことで建築物の本質が再び確認されていると思われる。退行化や劣化は、そのものの本質を浮き彫りにするような単純化がなされる場合には、かえってひとびとの想像力に訴え、その利用可能性を広げることができると考えられるから。

(10)

(15)

裏面には解答しないこと。裏面に解答しても採点しません。

令和７（2025）年度　芸術工学部編入学試験問題

小論文

解　答　紙

（3 枚中 2 枚目）

受　験　番　号

問２

【段落】たとえば森山大道の有名な写真「三沢の犬」を取り上げてみる。

その写真には、野犬と思われる一匹の犬が映し出されており、その犬は振り返ってこちらをにらんでいるようだ。その写真はモノクロームであり、諧調は飛んでおり、正確なピントの位置も定かではない。いわゆるアレブレボケの写真である。

【段落】一般に人気のある写真とは、諧調が豊かで、ブレがなく、ピントがシャープな美しいカラー写真であろう。絵葉書やグラビア、パンフレットに乗っているような鮮やかなものがそうである。だがそのような鮮明な画像にこの犬が収まっていたならば、鑑賞者に与える効果はより強いものになっただろうか。おそらくそうではない。それはなぜだろうか。

【段落】というのも鮮明なカラー写真は対象をあまりに精彩に写し出すことによって、かえって鑑賞者から想像力を奪ってしまうからである。逆に情報量を落とし、被写体である犬を単純な「テクスチュア」や不鮮明なフォルムへといわば抽象化することによって、鑑賞者はその抽象化された素材が示唆する犬のありかたを具体的に想像できるようになる。そうした隙間をあえて作ることで犬は鑑賞者を自分自身

裏面には解答しないこと。裏面に解答しても採点しません。

小論文

解　答　紙

受　験　番　号

の内部に引き込むのである。そのときには、鑑賞者自身がその犬に内 (20)
側から触れ、焼けつくような空腹、寄る辺なき焦燥感、自分を追い立
てる人々の声、荒ぶる生命の威力を追体験し、その眼を内部から光ら
せることになる。これが筆者の言う「内触覚や体性感覚」であると考
えられる。ぎりぎりの状況を生き抜く犬をその内側から体験すること
は、安全に管理された日常の中で忘れてしまった危機感、生きるか死ぬか
という生命にとって原初的な感覚を鑑賞者に思い出させるのだと思われる。

(30)